島田雅彦氏の『パンとサーカス』を読んだ。小説家として有名だが、今回が初読。法政大国際文化学部教授でもある。

高校時代、２人で秘密サークル「コントラ・ムンディ」（「世界の敵」を意味する）を作る。一人は米国留学を経て中央情報局（ＣＩＡ）エージェントとなって帰国。暴力団組長を父に持つもう一人は、父の知人の人材派遣会社で働くが、大物フィクサーから「世直し」を持ち掛けられる。「パンとサーカス」とは、政治的関心を失った民衆には食料と見せ物を与えておけば支配が楽という意味で使われている。日本は誰もが自発的に米国に服従しているという前提で話は進む。戦後、日本の政治は米国に服従し続けている。首相は代々無能で、米国への服従だけが使命であり、それを破ると抹殺される。（田中角栄がしかり？）。こんな日本の世直しの一例が示される。宗教、暗殺、テロ。

　現代は、パンデミック、デストピア、テロの時代といえるのではないか。島田氏は、若者たちが受動的に、資本主義や権力構造の中に組み込まれていく世相を憂い、若者への一つの行動を提言しているのだろう。防諜たちの暗躍する日本と米国、中国との関係が見えてくる。これが現実なのかもしれない。恐ろしいことである。日本と米国、中国の表面に現れない現実を知る契機になるかもしれない。